

○被害者遺族A 氏(女性) (平成 21 年 (当時 11 歳)、父を交通事故で失う)

[要旨]

家族4人で遭った事故

2009年4月4日、家族4人で車に乗っていたとき、右折したトラックが突っ込んできて、運転していた父が亡くなりました。当時、私は11歳でした。助手席に座っていた母は意識不明の重体でした。回復したものの、今も高次脳機能障害が残ってしまいました。後部座席に座っていた私と弟は全身打撲、むち打ちなどの軽傷でした。車の中で私が一番最初に意識を取り戻し、全身が痛すぎて動かせない中、車のガラスがすべて割れていて、父と母の名前をいくら呼んでも返事はないし、隣で弟も意識を失っていて、自分の身に何が起きているのか理解できませんでした。とりあえず、私と弟に腕があるか、足があるか、指が全部あるかを確認したのを覚えています。近くの工場の従業員の方々が車から助け出してくれました。父と母はそれぞれ別の病院に、私と弟は同じ病院に運ばれました。自分たちに起きている状況があまりにも非現実的すぎて、信じられませんでした。次の日の朝、祖母の家に従兄弟たち家族が集まり、父が亡くなったことを知らされました。

父の葬儀はすぐに行きませんでした。理由は母も死にそうだったので、一緒に葬儀をあげてあげたいという親戚たちの意見からでした。今はそのやさしさが理解できますが、当時は母が死ぬのをみんなが待っているようでとても悲しかったです。

夢の中で父が出てきたりもしました。しばらくは車が怖くて乗れませんでしたし、今でも少し怖いんです。なので、車の免許は生涯取らないと思います。

今でも毎日事故のことは思い出します。事故の瞬間や、最後に父と母が話した言葉をすべて覚えています。自分が意識を取り戻したあとの車の中の状態も、レスキュー隊が機材で車を切り、車体がささった母を助ける様子もすべてです。事故後、親戚たちは「子どもだから」という理由で、詳しい死因や、ペしゃんこになった車の写真、相手のことなど、事故の詳細を誰も何も教えてくれませんでした。事故のことは私しか覚えていません。母は意識がなかったので事故当時の記憶がありませんし、弟は小さかったので覚えていません。私だけが覚えていて、私が父の娘なのに、なぜ教えてくれないんだと恨んでいました。

友達と同じ小学生同士だったので、こんな話はしませんでした。ただ、親同士が集まればひそひそと話し、いやな人たちだなどと思っていた記憶はあります。また、今でも友達に父が亡くなっていることを話すと、謝られたり、同情されたりするのが面倒くさいので、父の日に何をあげたとか、誕生日プレゼントは何をあげたのかと話題になっても、「最近はあげていないから」とはぐらかします。

周りのサポートと傷ついたこと

周りに事故で親を亡くした子がいなくて、ましてや私のように事故を経験し、意識不明の両親を目の当たりにした子は今まで会ったことがありませんでした。初めてNASVAさんの集いで親を亡くした子たちと会い、気を使うことなく、事故の詳細を話し合うことができたときは本当にうれしかったです。金銭的に私からは頼めないような旅行に連れていってもらったり、3人家族としての思い出が増えました。また、トラック協会さんなどの協力のおかげで、家族でディズニーランドに行くことができたり、留学に行くチャンスをいただけたりました。これらは周りからのご支援がなかったら、す

べて自分たちではできなかったことです。感謝してもしきれません。留学に行った仲間たちとは今でも連絡を取り合っています。片親同士、気をつかうこともなく話せますし、みんな、同じ親を亡くしたという悲しみを抱えているので、私だけではないんだ、と心の支えになりました。

父を亡くし、母も障害が残ってしまったため、長時間働くことが厳しく、パートはしていますが、子どもとしては経済面が心配です。進学はどうすればよいのか、ましてやこれから3人で生活していけるのか、悩みました。そんなとき、無利子の奨学金を借りることができて、感謝しています。

親を亡くした精神的ダメージは皆さんが想像している以上に大きいです。ふとした瞬間に思い出しますし、普通に過ごしている日常でも、父の面影を見つけ泣いてしまうことが何度もあります。それらは、話を聞いてもらうだけでも軽減すると思います。「つらかったね」という言葉が欲しいわけではなく、ただ、静かに聞いていただけたらいいのです。

最近、給付奨学金の話聞き、経済的に少しでも助けになればと思い、応募してみようと年末に資料を集めましたら、提出書類には加害者の名前を記載したり、事故の証明書など、今まで知らない事実が必要でした。そのとき、私は初めて相手のトラックの運転手の名前と住所と年齢を知りました。なんともいえない感情になりましたし、今まで高校、大学とご支援いただいていたときにはそんな事細かく書くことはなかったのですが、知らなかった加害者のことまで知ってしまいました。私は今月末、二十歳になりますが、そのタイミングで従兄弟たちに事故の詳細を教えてください約束でしたが、思いがけない形で加害者のことを知ることになり、自分で思っていた以上に精神的に来てしまい、夢にも出てきました。住所も大して遠くなかったので、夢の中で相手の家に行って、事故のことを問い詰めたりもしていました。

もう大人になったつもりでいましたが、父を亡くしたことは今でも本当につらいですし、自分が年寄りになっても変わらないでしょう。この奨学金の団体の偉い人は、両親がいるのだろう、私もしその上人間ならこんなことは聞かないと思ったからです。NASVAさんや育英会さんは、本当に私たち交通遺児に寄り添っていてくれたのだと、この件で痛感しました。その奨学金に応募することはやめました。

支援団体の大切さ

どんなに時がたって、悲しいことは悲しいし、つらいことはつらい。それぞれ悲しさが違うので、母の苦しみを私は理解できないし、母も私の苦しみを理解できません。今年元日に親戚で集まったとき、「もうそろそろ9年がたって、お父さんの話を今では笑って話せるようになったね」と言われました。私はそのとき笑っていましたが、正直、すごく泣くのを我慢していました。祖母や従兄弟たちは私が悲しみを乗り越えたと思っていますが、私は生理現象のように父のことを思い出すと涙が出てしまいます。

NASVAさんや育英会さんのように、そういう気持ちを酌み取ってくれて支援してくださる団体が増えてくれればいいと思います。このような支援があることを私たち家族は事故の2、3年後に知りましたが、今もどこかでこのような支援を知らない人がいるのではないのでしょうか。親を亡くした子どもは経済的にも精神的にもダメージが大きいです。大げさに聞こえるかもしれませんが、もし、NASVAさんなどを知らなかったら、私は二十歳になれていなかったかもしれません。このような支援があることがもっと広まればいいなと思います。